HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	体験としての自閉症スペクトラム障害 : 成人期を生きる当事者の「パーソナリティ（personnalité）」の発展に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	木谷, 岐子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12747号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66147
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Michiko_Kiya_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士(教育学)　氏名　木谷　岐子

審査担当者　主査　特任教授　間宮　正幸
副査　准教授　岡田　智
副査　教授　室橋　春光　（天使大学看護栄養学部）
副査　教授　横山　登志子（札幌学院大学人文学部）

学位論文題名

体験としての自閉症スペクトラム障害
－成人期を生きる当事者の「パーソナリティ（personnalité）」の発展に着目して－

発達障害のある人々が抱える生涯にわたる困難への支援が衆目を集めている。成人期を生きる当事者の日常生活の支援内容の解明が課題である。

本論文は、独自の臨床経験を有する著者が、彼ら自身が困難な人生をいかに生きようとしているのか、その全体性を理解するための新たな視点の開拓を目的として調査的研究を行ったものである。これまで、臨床精神医学をはじめ関連領域の多くの研究は、客観的に記述できる症状や特徴を捉えることに関心を向けてきた。しかし、本論文は、先行する精神病理学や発達心理学の理論仮説を参考に、自閉症スペクトラム障害(以下 ASD)の成人当事者が抱える「自分」という意識のあり様に着目する。青年期から中年期へ移行する過程での体験のあり様を把握するための調査的研究方法を開拓したことにより、ASD 当事者の体験世界を探る先駆的研究となっている。

序章では、ASD 当事者の自己の領域を扱った先行研究を概観している。発達障害のある人々の生涯にわたる困難に関する研究の多くは数量的研究や横断的研究であり、一人の人の全体像を描出することには限界があった。しかし近年、ASD 当事者にインタビューを行い、質的に分析する研究が行われてきている変化を著者は確認している。本論文では、研究の方法として、当事者に「自分」について語ってもらう調査方法を採用することとし、その有効性と限界についても論じている。また、著者は本論で扱う「自分」という概念についても、先行研究を参照しつつ定義づけ、「自分」とは、他者と意味世界を共有する体験を蓄積する中で形成され、生活する世界との関わりのあり方全体を指す「パーソナリティ(personnalité)」(Wallon、H.)の中核となって機能するものと位置付けている。

第 1 章(研究 1)では、ASD 当事者 10 人にインタビューを実施し、M-GTA を採用して分

析を行った。分析の結果、成人後にASDと診断された人が「自分」を尋ね出していくプロセスが導出された。「おぼろげな自分を抱えた自分」が「苦悶のサイクル」を巡り、「身体の訴えをきき入れる」ことで「調整のサイクル」へと転じていくようなプロセスである。

第2章（研究2）は、研究1の調査協力者の中の1人へのインタビューデータを、改めて、ライフストーリーという観点からまとめ直したものである。ゆえに、研究1と研究2は、相補的関係にある。各年代を貫いている(1)刺激でいっぱいいっぱいになる自分、(2)他者との境界線が曖昧になる自分、(3)他者と“何か”を共有できていない自分、という三つ苦悩が示された。さらに、著者は「自分について他者に語る物語」(森岡)を持てないできた、その人の苦悩をとりあげている。ASDの人が診断後を生き抜いていく鍵は「繋がりを感じられる他者」と関わりながら「自分について他者に語る物語」を育み、安定させていくことにあると考察している。

第3章(研究3)では、ASDの当事者が集うセルフヘルプ・グループに4年間参加して得た音声データを、会話分析の手法を援用した「対話の分析」とM-GTAの手法を援用した「語りの分析」の二つの方法を用いて分析した。前者からは、(1)馴染む、(2)ずれる、(3)ずらす、というやりとりが示されている。後者からは、当事者がグループという場をどのように意味づけているのかが明らかにされ、メンバーとのやりとりが、グループ終了後もそれぞれの「自分」の内側で続いていき、日常の支えとなっていることが示されている。

終章では、三つの研究を通して得られた成果を示している。「パーソナリティ（personnalité）」の発展を促す契機となる体験として、(1)「自分」の身体性と繋がりをもつ体験、(2)診断告知によって社会と意味世界を共有する体験、(3)繋がりを感じられる他者と出会う体験の3点を見出したこと、さまざまな狭間を生きる彼らが「人の中で生きられる自分の形を探す」試みを続けている様相を描出したことなどが論じられている。

本論文の意義は、独自に開拓した調査的方法と分析によって、「自分」という意識の形成に関するデータを得て、成人期を生きるASD当事者の内的体験の意味世界と「パーソナリティ（personnalité）」の発展の契機を明らかにしたことにある。

以上の点で本論文は評価できる。しかし、言語化されない自己表現のデータ化などの限界も有り、さらなる質的研究方法の検討、開発が課題である。今後の研究を期待する。

本論文は、成人期を生きるASD当事者の体験世界を探る先駆的研究といえるもので臨床心理学研究および支援方法の改善に大いに貢献すると評価できる。

よって著者は北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。